

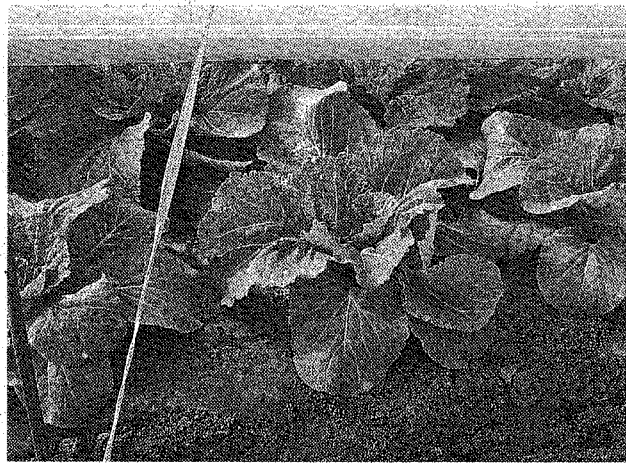
生分解性マルチで効率作業

時間が経つと分解されて土に戻る「生分解性マルチ」の効用を活かして野菜生産に取り組んでいる茨城県結城市の大嶋聡史さん。経営する面積が大きく、その回収及び処理作業の軽減効果から次第に利用面積が拡大。いまではほぼ6割で生分解性マルチを利用して生産している。大嶋さんを訪ね、生分解性マルチ利用のメリットや拡大していった経緯などを伺い、野菜生産にかける情熱に触れた。

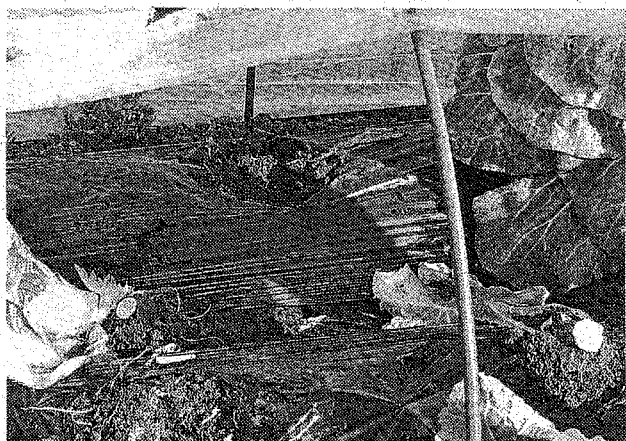
大嶋 聡史さん (大嶋農園・茨城県結城市)

現在の生産物と耕作面積は、春ハクサイ1120㎡、枝豆1300㎡、秋レタス1100㎡、秋レタス1100㎡、トビネ145㎡、秋冬ハクサイ1150㎡で、1年を通してカット野菜やキムチなどの加工業者へ供給している。

大嶋さんが生分解性マルチと出会ったのは6年前。販売店の担当者から勧められたのがきっかけで、使用を始めた。「価格は回収及び処理作業の軽減



張って40日後のマルチ



秋冬ハクサイ収穫後の分解が進んでいるマルチの様子

回収や処理が軽減

一般マルチは処理費増加

今より3割程度高く、本当に高いもの」という感

「以前は農じやポリの風によって、マルチが飛ばされたり、用後のマルチを引き取ってくれた。しかし、きれいに洗って、乾燥しな

「価格のみを見ると生分解性マルチの価格は既

「時期によっては、温度や湿度の影響で予定より早く分解が進み、効果が得られないこともあ

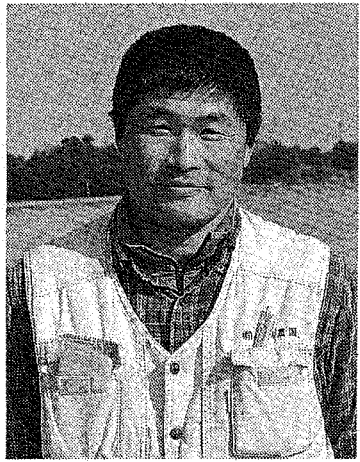
「価格のみを見ると生分解性マルチの価格は既

「価格のみを見ると生分解性マルチの価格は既

「価格のみを見ると生分解性マルチの価格は既

「価格のみを見ると生分解性マルチの価格は既

「価格のみを見ると生分解性マルチの価格は既

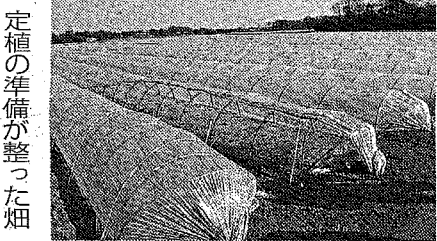


農場に立つ大嶋さん

農家ルポ

古くから農業が盛んしている。関東平野の中でも比較的稳定した農業地域である茨城県結城市。首都圏の生鮮野菜供給地として、ハクサイ・レタス・トマトなどの露地野菜等、多くの農産物の生産が盛んである。

茨城県結城市でハクサイ・レタスを中心に生産している(向)大嶋農園の大嶋聡史さん(41歳)は、両親と研修生7名(中国2名・ベトナム5名)で、およそ13畧の農地を管理



定植の準備が整った畑

「価格のみを見ると生分解性マルチの価格は既

「価格のみを見ると生分解性マルチの価格は既

「価格のみを見ると生分解性マルチの価格は既